

Peroral pancreatoscopy using the SpyGlass system for the assessment of intraductal papillary mucinous neoplasm of the pancreas

永吉, 洋介

<https://hdl.handle.net/2324/1441098>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



氏名：永吉 洋介

論文題名： Peroral pancreatoscopy using the SpyGlass system for the assessment of intraductal papillary mucinous neoplasm of the pancreas

(SpyGlassTMシステムを使用した経口胰管鏡検査による胰管内乳頭粘液性腫瘍の診断)

区分：甲

論文内容の要旨

親子式内視鏡システムを使用した経口胰管鏡 (peroralpancreatoscopy; POPS) は胰管内乳頭粘液性腫瘍 (intraductal papillary mucinous neoplasm;IPMN) の主胰管病変の評価に有用と報告されてきたが、様々な問題点があり広く普及するまでには至っていない。本研究では新しい SpyGlass 胆道胰管直視化システムを用いた IPMN 診断の有用性を検証した。当院で主胰管の拡張を伴った IPMN と診断された 17 症例について SpyGlass システムによる POPS を施行し、画像の質、悪性病変に対する細胞診および生検による病理組織学的検査の感度を評価した。12 例に SpyScope を、5 例には内視鏡的逆行性胆道胰管造影 (endoscopic retrograde cholangiopancreatography:ERCP) カテーテルを用いての POPS を施行した。

SpyScope 使用例では 92% で十分な可視化が得られたのに対し、ERCP カテーテル使用例では 40%のみで病変の観察が可能であった。直視下生検は 7 例で可能であり、組織は腺癌が 1 例、良性上皮性腫瘍が 5 例、再生上皮が 1 例で、悪性腫瘍を診断する感度は 25%、特異度は 100% であった。SpyScope を用いた POPS 下の洗浄細胞診は、悪性腫瘍の診断において感度が 100%、特異度も 100% であった。3 例では、SpyGlass システムを用いた POPS が手術時の脾臓切離線を決定するのに有用であった。検査に関連する重篤な偶発症は一例も認めなかった。以上より、SpyGlass システムを用いた POPS は主胰管拡張を伴う IPMN の診断に有用かつ適切な検査であると考えられた。